

「目を覚まして待つ」
ルカによる福音書 12 章 35-48 節

今日の聖書箇所には、キリストの再臨の時にどのように備えるかということが語られています。イエスさまは、「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」と言われました。なぜなら、その僕たちのために主人が帯を締めて給仕をしてくれるからだ、というのです。

常識で言えば、そんなことあり得ません。僕が主人のために用意しておくのは、当たり前のことです。しかし、そんなあり得ないようなことをして下さるのが、私たちの主人であるイエス・キリストなのです。

この譬えを読むとき、「わたしが留守の間、よくこの家を守ってくれた。さあ、あなた方を豊かな食卓に着かせよう。わたしと一緒に喜んでくれ」。そんな主人の語りかける声が聞こえてくるような思いがします。

この主人は、婚宴の席で自分だけが楽しんで「あー、楽しかった」で終わる人ではなかった。結婚式から帰った主人は祝宴でいただいたご馳走を、僕たちと分けたくてしようがありません。「誰か起きていると良いな」とわくわくしながら帰宅します。もし、帰ってきた時に全く出迎えが無かったなら、きつとがっかりすることでしょう。でもその時、誰かが起きていたなら、主人は小躍りして僕にいろいろとしてくれるのです。

神さまは、私たちとそういう喜びを共にしたいのです。神さまは、私たちに、いついかなる時でも粗相のないよう完璧にしている、というわけではありません。あなたたちには、そういう喜びの時が来るのだから、その約束を待っていなさいと言われるのです。イエスさまは、「その時は必ず来る」と約束されます。

だけど、私たちにとっては一つ問題があります。それは思いがけない時に来ることです。イエスさまは、盗人がいつ押し入るか分からないように、思いもかけない時に、突然やって来ると言われます。そして「このことをわきまえていなさい」と言われるのです。

では、私たちが、目を覚まして腰に帯を締め、ともし火をともしてイエスさまを迎える準備をしているとは、どのようなことを言うのでしょうか。いつも愛に満ちた行動をしていなさいということでしょうか？

いつもそう出来ていれば、言うことはありません。けれども、いくら目を覚ましていようと頑張ってみても、私たちには限界があります。疲れてしまう時があります。いつか分からない時を待ち続けることは不可能です。それならば、どうしてイエスさまは、私たちの出来もしないことを命令されるのでしょうか。それは、もちろんイエスさまは、私たちに不可能なことを求めているのではないからです。

イエスさまが来られる時、どうなるかということは、イエスさまは既に示してくださっています。それはイエスさまが復活して弟子たちに現れて下さった時です。

弟子たちは、イエスさまが捕らえられた時、皆イエスさまを見捨てて逃げて行ってしまいました。ペトロはイエスさまとの関係を否定しました。けれども、そんな弟子たちのところに復活されたイエスさま来られたのです。弟子たちにしてみたら合わせる顔がありません。罰せられるのではないか、そんな恐れもあったことでしょう。ところが、復活のイエスさまが来られた時、まさしくそれがイエスさまであることを知って弟子たちは喜びました。ご自分を見捨てた弟子たちを赦し、再び弟子として世界に遣わすために来られたイエスさまを喜んだのです。

その時、弟子たちは自分たちの弱さ、罪深さを知りました。自分の身を守るためには、イエスさまさえも見捨てるといふ弱さがあることを知りました。それゆえ、そんな自分たちを救ってくださるイエスさま抜きには生きられないことを知りました。ですから、復活のイエスさまが来られた時、喜んだのです。

「こんなどうしようもない私をどうか救ってください」。そのように言うことしかできない自分があります。しかし、そのように言うことしかできない私たちを、赦し、天の国へ迎え入れて下さるイエスさまがおられる。その時、キリストの再臨は喜ばしいこととなるのです。

「目を覚ましていなさい」というのは、いつも清く正しくあらねばということではありません。この主イエス・キリストにいつでも心からすがることができる。このことが、主人であるイエスさまが来られる準備ができていること、つまり、目を覚ましていることだと思うのです。

私たちに示されている主人の思い、神さまの御心とは、独り子の命すら与えて下さった父なる神さまの愛の御心です。そして終わりの時、イエスさまは、私たちに神さまとの祝宴の場所を用意してください。私たちに神さまとの親しい交わりと本当の喜びを完成させてくださるのです。私たちは、その日を希望として待ち望みたいと願います。